



第 236 号 2026 年 4 月 発行

ひまわりばたけ

瓢鰻亭 ひまわりこども みやこ町豊津 326-1

TEL 0930 - 33 - 8080



瓢鰻亭は今

前田 賤

今年も堤沿いや校庭や神社、お寺などあちらこちらに咲く桜の花の見事さを堪能しました。今は新

芽が美しい葉桜を楽しみにしています。

初夏を間近にして我が家では楓と梅と花梨が柔らかい緑に萌え、春先に暖かそうな衣装をまとっていた琵琶の芽も白っぽい角を突き出しています。そして楠は古い葉を落とし、こんもりと赤茶を帯びた新芽を茂らせ、ふとぶととした幹でしっかりと立っています。その根元ではすでに躑躅が花を咲かせています。おおむね穏やかな時の中にある木々ですが、棗と百日紅には心配させられています。棗は百年を超す老木で、ずいぶん前の台風で斜めに横倒しになったままです。なおかつ最近ではアケビが絡みつき老木の大部分を覆ってしまっています。ここ数年、アケビは大量の実をならせ、とても元気なのですが、覆われている老木のことを思うと可とすべきかどうか悩むところになっています。

屋敷内には青桐や樺など遠目に新芽を見ることのできない木々もあります。初夏を控えたこの時期の

新緑を眺めていると季節の着実な歩みを実感します。

瓢鰻亭恒例の味噌づくりは三月末の二日間、つつがなく開催できました。例年、参加してくださっている保育園、幼稚園の先生方と食育についての話題で盛り上がりました。その際に、以前、保育園で味噌づくりをしていたことを思い出しました。そこは長くお付き合いのあった保育園で、そこに耶馬溪の古い友人であるお母さん方と小さな仲間である子どもたちが集い、一緒になって味噌づくりを楽しんだのでした。

公民館では班ごとにミキサーを使い、出来上がったものは密封容器に入れて持ち帰ってもらいました。保育園では柔らかく炊いた大豆を丈夫なビニール袋に入れて、それを園児が足で踏んで、つぶして、塩と麴を混ぜて大きな容器で保存しま

した。出来上がった味噌は給食の材料にするほか、園児には小分けして持ち帰ってもらったようでした。

子どもたちはモノづくりが大好きです。しかも本物志向でもありません。木工や作陶などいろいろなことに一緒に挑戦しました。なかでも食べ物づくりは大好きで、材料を整える、調理する、そして何よりもそれを食する楽しみは大きいものがあります。

味噌づくりでは原材料の煮大豆、麴、塩を味わって、味噌への変化を知ってもらいます。つぶした煮大豆と塩と麴を混ぜる。あとは麴菌の働きに任せて、二、三ヶ月待てばおいしい味噌が出来上がります。何の添加物も用いず、器に入れたが最後、出来上がりを待つだけなんて、最高の食育モデルです。園児たちとまた、味噌づくりをしたいものです。

コロナ禍以降、行事が抱きにくくなっておりますが、これからはまた、色々な催し物を行っていかうと思っております。



書棚から

瓢箪亭の入り口正面の棚が入れ替わりました。長くお付き合いをいただいている方が棚を寄付してくださり、それにあわせて絵本のレイアウトを変えました。「本屋さんみたい」という声が聞こえてきました。

棚に面珍されているおすすめの本の中に「なぜ戦争はよくないか」があります。アリス・ウォーカーのこの作品は店主のこだわりの一冊です。戦争の怖さ、恐ろしさを伝えるこの絵本は今、まさに繰り返し広げられている戦争を考えるためにも是非、手に取っていただきたいと思います。タイトルの「なぜ」という言葉、私たちはこの「なぜ」という言葉を決して忘れてはいけません。作中

に「なぜ」の回答はきちんと記されていますが、それとは別に、「なぜ」と、自分自身に問いかけ、その答えを考える必要があると思います。あるいは、子どもさんに「なぜ戦争はだめなの?」と、問いかけ、一緒に答えを考えるとというのはどうでしょうか。

以下、出版社(偕成社)の公式ページの記事を転記しました。

なぜ戦争はよくないか

アリス・ウォーカー 文
ステファニー・ヴィタール 絵
長田弘 訳
定価(本体価格)1500円+税

姿を巧みに隠し忍びよる戦争のこわさ、おそろしさを伝える絵本の深みのある文章と、力強い絵で読む人の心に静かに語りかけます。本を開いてみると、子どもにもわかるやさしい言葉で、語りかけるように、戦争とはいったいどういうものか、ということが書かれています。物でもなく人でもない、実体のない戦争がもたらすおそろしさを、抽

象的に、けれども、深く解き明かしていきます。

戦争がどういふものかは一言でいいあらわすことは難しいですが、この絵本では、私たちが大切にしなければいけない、大切にしたいものを、戦争がどのように変えていくかという表現で、戦争を語っていきま。戦争を体験していない私たちの感性にうったえかけることで、深く戦争の姿を伝える1冊です。

本とその周辺

▼以前、紹介した藤原マキのパートナーつげ義春が亡くなった。ねじ式、無能の人、李さん一家、紅い花などの奇跡的と言っても良い作品群には本当に楽しませてもらった。また、それ以前の奇怪、ミステリー作品にも傑作が多かった。

▼つげは文章の達人でもあった。そのゆつたりとした筆致が本当に快かった。紀行文の代表作「貧

▼ひまわりイベント

5月

2日(土) ひまわり連歌 11時
16日(土) 子ども連歌 5時
17日(日) 絵本の時間 13時
22日(金) 楽しく歌おう

松尾範子教室 10時半
24日(日) 今井祇園連歌の会 13時



困旅行記』には小倉、湯平温泉、杖立温泉を彷徨う九州蒸発行が冒頭に載せられている。何一つ解決することも、ドラマもなく九州にたどり着き、去っていくだけの旅行記ではあるが、読み終わると良質な掌編小説だと実感させられるものであった。

▼つげは70年代初めに国東半島を訪れている。その際の写真集に天念寺の川中不動の貴重な写真がある。